

## 国内での乳幼児の自動車内熱中症による死亡事故—気象条件との関係

○高橋美加、佐々木昭彦

(公衆衛生院)

**目的** 日本では乳幼児の自動車内熱中症死亡事故の報告が近年増加しており、母親のパチンコへの熱中が問題視されることが多い。一方、自動車内の温室効果は周知のことではあるが、事故の起きた季節、時間、場所等との関連について考慮した研究は乏しい。本研究では、過去の車内放置による熱中症死亡事故を分析し、死亡に至る気象条件について検討した。

**方法** 国内における過去14年間(1985～1998年)の自動車内熱中症による死亡事故に関する新聞記事(全国紙全国版地方版及び地方紙)を調査し、気象データとあわせて分析を行った。

**結果** 記事に現れた乳幼児の自動車内熱中症による死亡事故は過去14年間で26件、そのうち約7割が責任者(主に親)による車内放置に起因していた。1991年を除き、1985～1993年までは年間0～1件であったが、1994年以降は毎年、年間3～4件となった。気象条件からみると、外気温が高く日射の強い夏に多いが、春(3,4月)や秋(9,10月)に起きた年もあり、車内放置による熱中症死亡事故は単に夏の暑さだけが問題ではないことが明らかになった。